



平成 28 年度

# 事務所だより 第 5 号

平成 28 年 11 月 14 日

益田教育事務所



「個別の指導計画」活用してますか？

学校教育スタッフ 指導主事 杉原 貴宏

「発達障害者支援法」が平成 17 年 4 月より施行され 10 年が経過し、平成 28 年 8 月に「発達障害者支援法の一部を改正する法律」が施行されたことをご存知でしょうか？改正のポイント等は厚生労働省の HP をご覧いただけたらと思います。

さて、皆さんは「個別の指導計画」をどのようなものとして捉えておられるでしょうか？「個別の指導計画」は、関わる支援者の間で目標や目標を達成するための具体的な支援方法を共有するためのものであり、児童生徒理解のツールでもあります。そして、(本人の発達段階に合わせて…) 児童生徒本人の「どうありたいか」(今の自分の力で可能な姿)と「どうなりたいか」(取組により変容する姿)の具体的なイメージが持てる自己理解のツールでもあるのです。児童生徒本人のため(もちろん関わる支援者にとってもですが…)と考えると、「個別の指導計画」の短期目標は、本人、保護者、学校の思いや考えを調整した上で「具体的な言動で表す」「無理なく実践できる数にする」という視点で設定するとよいと思います。

短期目標を「具体的な言動で表す」ためには、3つのポイントがあります。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 客観的でわかりやすい動詞で記入する。</li><li>② 応用範囲が広い行動目標は場面を限定する。</li><li>③ 条件、基準を設定する。</li></ol> |
|---|

①の客観的でわかりやすい動詞とは、例えば「～をする」「～ができる」「～を言う」「～を書く」等の動詞のことです。よく「～がわかる」「～を理解する」「～を知る」「～を楽しむ」等の動詞を使ったりするのですが、達成したのかどうか客観的にわかりにくいと思いませんか？

②の場面の限定とは、例えば「清潔にする」では服装のことから歯磨き、洗顔と応用範囲が広いので、いつどこで何をするのかははっきりしません。「給食前に石鹸を使って手を洗う」という目標にするとどうでしょう？支援者は支援内容がはっきりするのと同時に、本人も何をするべきか明確になります。

③は、「～した時」「～の支援がある時」という条件と「～割以上」「～分以内」という基準を設定することです。支援者も本人もいつ、どんな時、どのくらいで目標を達成できたか明確になりますよね。

また、「個別の指導計画」作成がゴールではありません。「無理なく実践できる数」にすることで、達成できたら次の目標…というように、関わる支援者にとっては適時必要なことを加筆修正できる使えるツールとなり、本人にとっても目標が焦点化、明確化され、一つ一つスモールステップで取り組め、達成状況も「見える化」できます。

現在作成されている「個別の指導計画」を以上のような視点で再度確認をしてみてもはどうでしょうか？

## 「秋」といえば・・・～読書・子どもの生活・大人の姿～

吉賀町教育委員会 派遣社会教育主事 杉内直也

「〇〇の秋」とよく言われます。食欲の秋、芸術の秋、スポーツの秋、読書の秋……。まだまだあると思いますが、少し「読書」に焦点を当てて子どもたちの生活を振り返ってみようと思います。

学校に目を向けてみると、小学校では地域ボランティアの方による読み語りが行われています。地域の方はどんな本と出会わせようかと、子どもの顔を想像しながら選書をされます。また、中学校では朝読書が行われており、シーンとした静寂の中で黙々と読書をする、凜とした空気の中での心地よい時間が流れています。



地域に目を向けてみると、9月に町立図書館のイベントで地域団体の方による人形劇「じごくのそうべえ」（田島征彦作）が行われました。このお話はご存知の方も多いのではないでしょうか。私は人形劇を見るのは子どもの頃以来本当に久し振りでしたので、とても懐かしい気持ちになりました。絵本の世界を人形劇で再現され、音楽や動きを交えながら、子どもも大人も

本の世界に浸る、楽しい時間となりました。

家庭に目を向けてみると、町内の小中学生親子を対象に行った「児童・生徒の読書についてのアンケート（H25.7 吉賀町社会教育委員の会）」の結果では、小さい頃読み聞かせを行っていた保護者は80%弱と高い割合を示しています。それに対して、現在親子や兄弟と一緒に読書をする割合は40%弱という現状であることがわかりました。

つまり、家庭においては乳幼児期の読み聞かせは行っているが、その後は本と一緒に楽しむことがあまり行われていないということです。私自身の生活を振り返ってみても、わが子が小さい頃には読み聞かせをしていましたが、最近子どもと一緒に本と触れ合っていないことに気づかされます。まさに、アンケート結果通りの生活です。その要因の一つとして、生活の中で無意識のうちに電子メディア（テレビ・パソコン・スマートフォン等）との接触機会が増えているからのような気がします。そして、子どもが目にする大人の姿としても「本（活字）を読んでいる姿」より「電子メディアの画面を見ている姿」の方が多いのではないのでしょうか。皆さんはどのように思われますか。

本（活字）に親しむ生活環境づくりに向けての良いアイデアがありましたら、ぜひ教えていただけたらと思います。一緒に考え、「読書」に親しみ、実りの多い秋にできたらと思う今日この頃です。



